

『ナマケモノの妖精』作者 尾生 礼人

昔、神様が生きものを作った時のことです。

はじめは、天使達にお世話させていましたが、

沢山 作りすぎたせいで、人手が足りなくなつて

しまいました。困った神様は、妖精さんに

お手伝いしてもらおうとしました。

ところで、妖精さんは自分の体をもちません。

おなかはすきませんが、おいしいものを食べることも出来ないのです。

神様は妖精達を集めると、言いました。

「生きもののお世話をすめなら、その体に宿るじやを評せよう。」

妖精達は大喜び。なぜって生きもの体に宿れば、

『気持ちいい』や『美味い』を感じられるからです。

妖精たちは、さっそくお世話を始めました。

お花さんに宿るなら、お日さまがよく当たるように

お顔のむきをチョロドロかえてあげます。

そうすると、お花さんはひなたぼっこ出来て、妖精さんも

ポカポカあたたかいです。

リスさんに宿るなら、ドングリが落ちてくるように

コソコソお顔をむけてあげます。そうすると、リスさんは

ドングリを見つけて食べられるので、妖精さんも

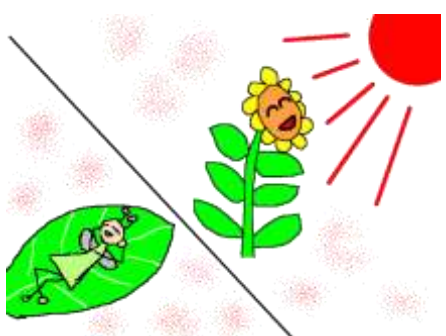
モグモグおいしいのです。

(みなさんも何かを発見することがあったら、それは

妖精さんのおかげかもしれないよ?)

みなさん、もうおわかりですか?..

妖精さんは、生きもののお心と体を100%、操ることが出来るのです。



でも、それをしていいのは『お世話に必要なとき』だけ…。
それも、気づかれないよう、コッソリやるきまりでした。

目に見えない誰かがそんなことしてるなんて知ったら、
おちつきませんからね。

その生きものが『イヤがることをしてはダメ』という
決まりもありません。

でも、そこはイタズラ好きの妖精たち…。

『お世話のため…』とイイワケしては、イタズラをしていました。

イタズラというカワイク聞こえますが、妖精たちのイタズラは、おもしろ半分で命を
つぶったり、心をキズつけたりする、ザンクなものばかり…。

妖精のほうでもそれを心配してよく見張ってはいたのですが、たくさんの生きものをお
世話する妖精さんは、その数もまたたくさんです。とても見張りきれぬものではありません
せん。

そこで妖精は、妖精たちに『かんさし日記』をつけさせることにしました。

それも、ウソを書く頭がイタくなる、魔法の『かんさし日記』じゃ。

つまりイチイチ見張っていても、日記さえ読めばきちんとお世話が
されているか分かる、よごしわけでした。

妖精たちはシブシブイタズラをひかえるようになりましたが、

なんとかズルをしようと日記のつけかたを工夫するうち、『ぬけみち』を見つけました。



『ウンじゃないけど、ホントでもない』と『なり、書いても頭がイタクならないのです』。

妖精たちはコシを利用して、自分たちのしたイタズラを、さも生きものたちがやったよう
に見せかけました。

つまり、読む人がゴカイするような書きかたを、わざとしたのです。

とは言え、バシたら大変ですから、はじめのころはたまーにやるだけでした。

でも、くらやんでも何も言われないので、ドンドンやるようになりました。

悪いことだ、イタズラしたがる妖精さんは、一人や二人ではありません。



でも、いきなりイタズラがふえたら、神様もヘンに思いますよね？



ましてや、生きものたちは神様にとって大切な子ども…。
子どもがフルサをしたなんて信じたがる親はいません。

そこで妖精たちは、ウソのストーリーをこしらえることになりました。

《はじめは神様の教えを守ってよい子でいらしていた生きものたちは、
だんだんぐらぐらが泣くようになったわい、悪い子になってしまった。》

なぜかは分かりませんが、一見もっともらしく聞かせますよね。

『どんなウソでも、たくさんの人が言うことホントに聞かせる。』

と言いますが、神様は、あることがそのウソを信じてしまいました。

まさしく、『木を隠すには森の中』…。

生きものみんなを悪い子に仕立てた妖精たちは、やりたい放題でした。

でも、相手は神様、エライ人です。

そんなエライ人を簡単にだませたものでしょうか？

しかし、これが案外うまくいきました。

「あんまりたぐやと書いてあると読むのがタイヘンだから、
日記はみんなだけみじかしく書いて…。」

と神様が命じていたのです。



じつじつ神様は、生きものひとりひとりのじつじつを知ることが、日記を書かなくて
いることをウソに聞こえてしまいました。

そのくせ、神様が生きものたちを滅ぼそうとするのを、

「わるい子たちだけではありません。」

「チャンスをおげいひなれ。」

と、引きよめるのだった。

なぜって、もう一度作り直すことに、なにが悪かったか調べて、ウツカリホントウの
じつじつがバレたらタイヘンですからね。

あれから千年…。

妖精達は、いつしよつげんめい生きものを『お世話』
していましたが、それは『のりもの』として使ったため…。
オモチャにするためでした。

そんなことも知らない神様は、

「妖精たちは働き者じゃのう…。」
と、ほめることになりました。



でも、そんな中にも一人だけ、ナマケモノがいました。
ハックです。

ハックは、生きものが困っていても知らなびり…。
悲鳴をあげるまでほづつとおいこから、ジブジブ助けるのです。
ハックの言いぶんは、じぶじぶだ。

「いつも助けていたら、ナマケモノになってしまう…。」
「なんでも自分でやるクセをつけさせないといけない。」



そんなハックでしたが、意外なことに『ぬけみち』を知らませんでした。

仲間がいそがしいときにも手伝わなかったせいで、自分だけやり方を教えてもらえなかつたのです。

いちおうきえこはみましたが、頭を使うこともなまけてたせいで、分かりません。

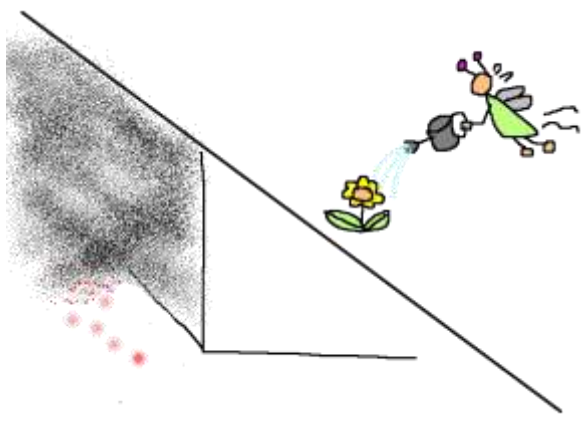
じぶじぶ「教えないと神様はびりすー!」とをわざだしたので、仲間たちはジブジブ教えることになりました。

「まずは動機をよういするんだ。」

「お酒を飲んでたとか、ショックな出来事があったとか…」
「それらしければ、なんでもござい。」

「のってって、迷うフリをするのをわすれるな。」
「イタズラがおわったら、良心を責めて…」

「反省したとじろを日記にっけろ。」



そのころ、子ネコのお世話^{せわ}をしていたハック…。
飼い主の人間のおうちで、食^くべては寝る生活です。

そんなある日、テーブルの上に
おいしそうなケーキを見つけました。

お母さんが子どもに作^{つく}ったバースデイ・ケーキです、

ハックは、考えました。

『子ネコは、イタズラ好きと評判だ。

のこともバしたりしない…。』

さっそくのしつこくとしたハックですが、
すべては動きません。

仲間がくれたアドバイスをおもいだしたのです。

頭の中

『おわっちゃダメ。』

『いじわるな、ママ。』

を何回か思いつかべてから、

『ちょっと、なめるだけ…。』

と流されたフリをしたのでした。

そうして、ゆうゆうテーブルに飛びのるじ、

じころゆくまでケーキをたんのうしたのです。

イタズラがおわって、子ネコがわねに
かえったときには、

もう手おへむ…。

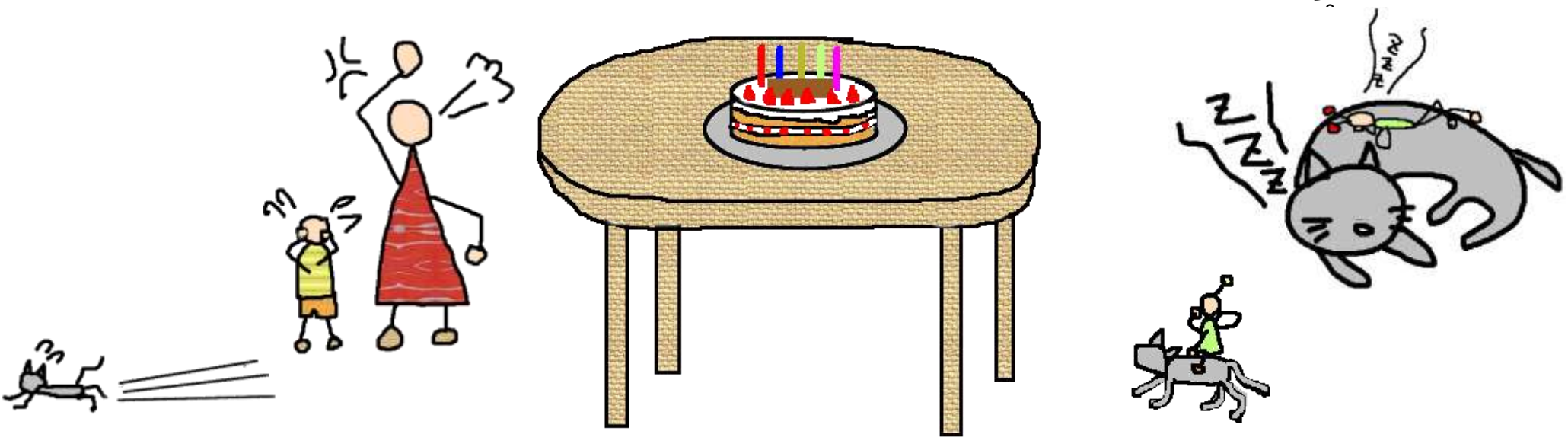
ケーキはメチャメチャ。

お母さんはカンカン。

子どもはフンフン泣いています。

かわいそうに、子ネコは

おうちを追い出されてしまいました。



子ネコはトボトボと歩きながら、

『なんで、あんなじじ、しちゃったんだろ…?』

と首をかしげました。

しかし、ハックが迷うフリをした時のこと、
流されるフリをした時のことを思い出させるじじ、



『そっか、誘惑に負けたんだ…。』

そうかんちがいすると、またおちいんでトボトボと歩いていきました。
じじが、『のじじの』のフシギなところ…。

のっとられているあいだは、自分と妖精まじさんのくぐつがつかないのです。
むしろ、妖精さんが本体なので自分にはどうにも出来ないのです。
自由のない一人羽織と言ったところでしょうか？



じじびよく子ネコに反省をさせたハックは、

『〇月×日。』

子ネコは、誘惑に負けてケーキをだいなしにしたと
反省しました。』

と日記につけました。

ウソではありませんよね？

でも、神様かみさまは気づきませんでしたし、
天使てんしたちもなにも言いませんでした。



《第一章》

あーっ、ハックが人間の町を見物しているよ、
子どもたちが「ヘンテコなおかしをおいし〜」って
ほおばったり、ピカピカひかるオモチャで
夢中になって遊んでいるのを見かけました。

『いいなあ…。おいしそうだなあ、楽しそうだなあ…。』
と、ハックはキョウウミした。…。

しぎは人間の子どもをお世話するのじつじつしました。

お世話をするのは、生まれたばかりの男の子を、
エリオンと言いました。

お父さんは、がんばって働いてお金持ちになった、
とわかる。成金。だよ。

お金持ちのおうちならゼイタクができますからね。

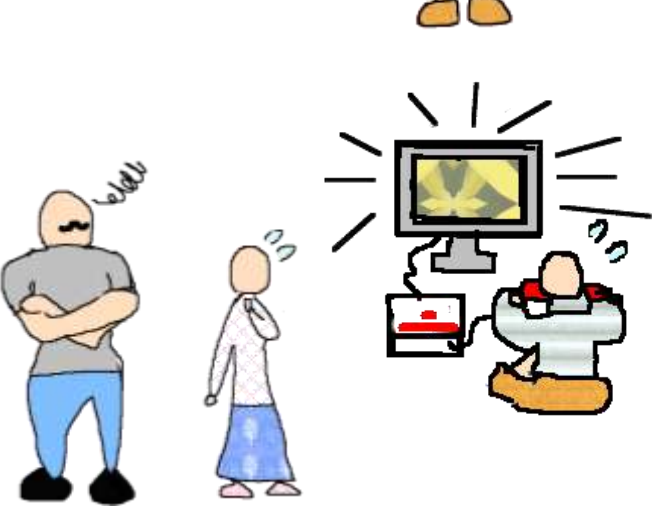
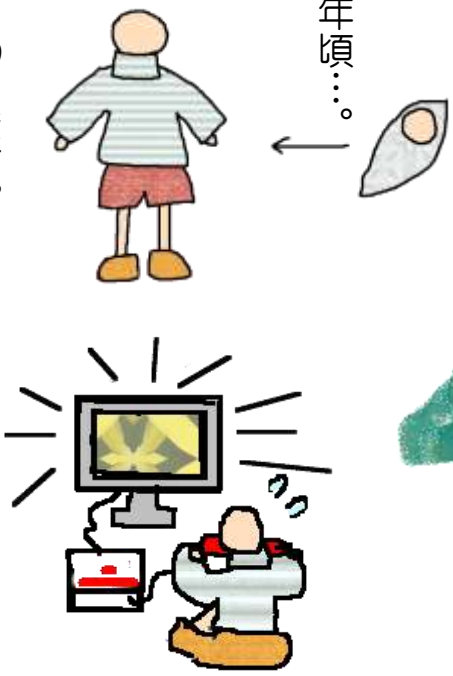
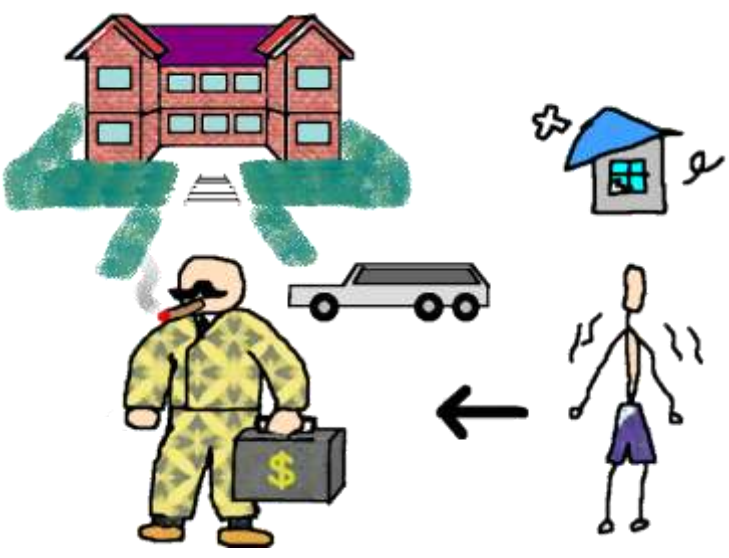
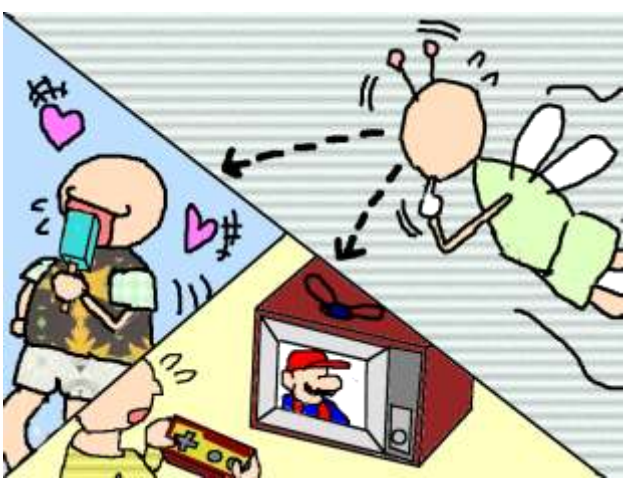
しぎが都会の名家だと仲間と奪い合っているのですが、
そのしぎのしぎんと手をこったのです。

もちろん、お金のないおうちでも、
両親をわるいおまじないで応援すれば、
ギャンブルや、ペン師として成功させられますが、
それはそれで面倒なのでした。

…えい、男の子はスクスク育ち、
よつやくおかしやオモチャを楽しむお年頃…。
でも、オモチャで遊んではかりでは、
お友達ができません。
お勉強だっておそろかになります。

おかしを食べすぎれば太りますし、
冷たいジュースも飲みすぎればおなかをこわします。

ふつうは、イタイ目にあうと気をつけますが、
お父さんやお母さんがいへら言っても、
なおりません。



いつしか、エリオンは『遊んでばかりで、だらしのなごみ』と呼ばれるようになりました。

ここがハックのかしここところ…。

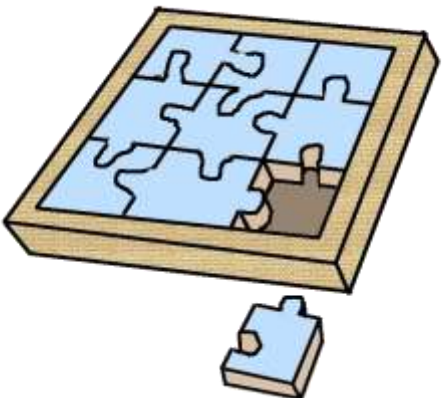
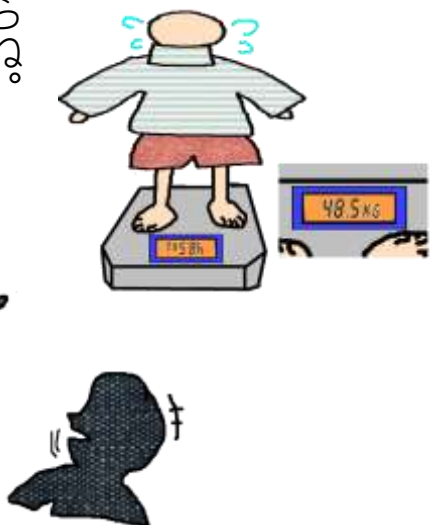
なにしろ、生きものは妖精ようせいさんのことを知りません。そういう評判があれば、乗っ取って遊びほつけても誰にも（それこそ、エリオン自身にも）気づかれませんかからね。

そんなハックがなにより困るのは、エリオンがお手伝いや

勉強の楽しさを知ってしまうこと…。

ここだけの話、お手伝いにはパズルや積み木のような楽しさが、勉強にはクイズやナゾナゾのような面白さがあるんです。

そういうことを知られてしまったら、やりたくなくなるからね。



街に出かけるとか…。そうだった香道は、さすがに入心と思わわってましたよね？
でも、アイドルにあげられていたら、むしろいいよね？？好奇心と良し訳を使ったら、
いいよね？？

妖精たちはイイワケとなる『ストーリー』を何年も前から用意して、『予定』を書き
にいたのでした。でも、何年も前からだなんてタイムインすごいよね？？

でも、前にも言ったように「こちらの数ヶ月はむしろの一口…。

ですから、妖精さんがとくべつ気がながいというわけではないのでした。

ときには、『みんなの前でハダカになる』など、ムチャクチャな予定を書かれた生きもの
もいましたが、そんな予定を『あるー！あるー！』と思えるのは、ほめられたことよいか？
『作品には、作者の「口」が表れる。』と言います。

妖精たちの心は、そういう病んでいたのかもしれない…。。

他の子とも遊べるようになったのです。

そして、それを知った神様が喜んで、

『これからも、オトモダチのいない子がいたら、
いっしょに遊んであげなさい。』

と、天使たち全員に命じたのでした。



よかれと思つてのことですが、実際にやるのは結構タイヘンです。

『他人との距離感を縮めさせる』『自分から声をかける勇気を持たせる』『相手やその状態によって誘い方を工夫させる』など、一つ一つ丁寧に教えないといけません。

生存本能から来る恐怖もあるので時にはスバルタが必要ですが、突き放すのではなく、よりそうことが肝心なのでした。

家族や恋人ならともかく、だれかれ構わず親身によりそうなんて、なかなか出来ることではありません。オマケに、知らない人との お付き合いは、生存本能もあって、大の大人でも怖いものです。

さて、なかなか、あきらめようとしないうエリオンに、天使たちはイラだっていました。なぜって、このままでは、言いつけをまもってないことが神様にばれてしまいます。

天使たちは神様に「しかられられたくない一心で、形だけ遊んであげることになりました。遊びの内容は、『なぞなぞ』や『かくれんぼ』です。それこそ、大人の学者さんでもむずかしいナゾナゾや、魔法でトウメイになってのかくれんぼ…。

つまり、なにをして遊ぶかは、天使たちの自由なのでした。

イジメている所を見つかったいじめっ子が『遊んであげていただけ…。』とイイワケしますが、あんな感じですよ。

…そうそう。物語の中で 人質をとった魔王が主人公に対し、『ゲームをしよう。』とか、『一つ、賭けをしないか?』なんて持ちかけますが、アしは後でイイワケするための前置き、アリバイなんです。みなさん、そんなふうには持ちかけられても、けっして調子を合わせてはいけませんよ?

ともあれ、そんなわけで、最初は がんばって通っていたエリオンも、

『ボクは、天使様にもきらわれているんだ…。』

と、なんとなくさっさと、公園に通うのをやめてしまいました。

でも、やっぱり、そびっしりものはそびっしりのわが。

『こんな自分でも、神様なら、きっと相手にしてくれる。』
エリオンは、そう考えて、教会をたずねることにしました。

天使たちは、おおあわて…。

このままでは、いいつけを守っていないことが、ばれてしまいます。
いそいで大雨をふらせてカミナリをならすと、エリオンが教会をたずねるのをジヤマとして
しまいました。

そうして、夜にエリオンの夢の中へ神様のフリをしてあらわれるじ、

『お前のような悪い子は、来てはならん！』

と伝えたのです。

では、よい子になったら会ってもらえるのでしょうか？

もちろん、ちがいます。

天使たちは、ふたたびエリオンの夢にあらわれるじ、

『テストに合格すれば、会ってあげよう。』

と伝えました。

ちがいな生きものを自分より大切に出来るか？というテストです。

もちろん、イカサマです。

じつは天使たちは、妖精たちのイタズラなんて、とっくにお見通し。

妖精たちがクビになると自分たちの仕事かぶるのでだまっていたのです。

なにをかくそう、妖精たちのイタズラのおてほんは、天使たちでした。

天使たちは早くから、生きものをオモチャにしていたのです。

チガイがあるとすれば、妖精がイタズラ目的なのをたいて、

天使は『恋愛』が目的でした。

と言っても、それはあまたらオシマイの『恋愛』…。

恋のトラブルがふえたら、それは天使たちのせいかもしれませんね。

天使たちはエリオンに

『□□がみじくいから、相手についてもらえなう』

《第5章》

さあ、こうなってしまうえばハックの天下。遊びほうだいです。でも、子どもはいつか大人になるもの…。

いつまでもそのままで、お世話^{せわ}をなまけていたことがばれてしまいます。これがネコなど、他の生きものなら「まかせたのですが、

人間は神様^{かみさま}が自分ににせて作^{つく}ったほごですから、どいつしてもめだちます。

そこでハックは、エリオンに「つねねやまもした」。

「私は神様^{かみさま}だ。お前はお手伝いも勉強もせず、遊んでばかりの悪い子だ。

これからは、私の言うことを聞いてよご子になりなさい。」

これを聞いたエリオンは、

『悲しいけど、やっぱりボクは悪い子だったんだナァ…。』

でも、神様^{かみさま}がボクを見てくださっている…。』
と感動し、言われるがママ、お手伝いや勉強をするようになりました。

(これまでは、しようとしてもハックにジャマされてできなかったのです。)

でも、悪い子がいきなりよい子にかわったら入んですよね？

ハックは、乗っ取る回数をジョジョに減らすよ、

エリオンがだんだんいい子になったように見せかけました。

妖精^{まじ}たちが生きものを悪い子に仕立てるときは、本人にもあやしまれないよう、はじめは手を添えてクセをつけさせからパターン通り実行させるのですが、今回はその逆をやったのです。(思いどおしまるようなら背中を押すのですが、結構手間です)

しばらくすると、ハックは神様^{かみさま}に自分の手柄を報告しました。

「あんなに悪い子だったのが、私のおかげでこんなにもよい子になりました」
すべてを知^しってそうで意外となにも知らない神様^{かみさま}は、ハックをベタ褒めです。

今度も天使^{てんし}たちは、なにも言いませんでした。

《第6章》

ハックは神様かみさまにほめられて得意顔でしたが、そうは問屋がおろしません。最近、エリオンが『のっとり』について気づき始めていたのです。あわてたハックは、いそいでお父さんやお母さんをあやつると、『自分でやったことを、人のせいにするんじゃないやありません!』『自分のココロがみにくいことをみとめなさい!』とサンザンにしからせました。

そうしてエリオンに

「だれでも、悪いところをもっていろ。」

「それをみとめてこそ、リップになれる。」

じゅんやが「サンザンやせぬよ」と言を口説くちやくつけたのでした。

エリオンはそれ以来、(ときおりシャクゼンとしないものの、)『ボクは、しょうねのいやしいサイテーの人間だ…。』
と思いつながら、ウジウジとすすじっていました。

しかし、そんなある日、エリオンは、ふとしたはずみでホントウのことに気づくと、大声で泣きだしました。

だれも相手にしてくれないけれど、神様かみさまだけは…
思っていたのが、やっぱりウソだったからです。



するよ、どっぴでしよう。

その声が神様に届いたではありませんか。

神様は今さらながら（ホントに今さらですが…、）
本当のことを知ってカンカンです。

天使たちは自分たちにまで火の粉が飛ばないように、
あわててハック一人のせいにしよとしましたが、
ハックも自分だけがしかられてはたまりません。

なんとか罰を減らしてもらおうと

天使たちのしてきたことをバラしてしまいました。

もとはといえば、ハックがナマケモノなのは、

天使たちが自分たちのぶんのおこぼれを
妖精におしつけてきたからです。

なにしろ、最近の天使ときたら、お気にいりの
生きものと遊ぶことだけが『おこぼれ』です。

ウツカリ「お世話するのも楽しいなよ」「なんて
言った日にはタイヘン…。」

天使達のぶんまでおこぼれを押しつけられて
しまうのです。

実際、今日となっては、お世話の『かけもち』を
している妖精さんはめずらしくありません。

ハックはそれがイヤで、たった一匹のお世話でもシブシブやってみせ、

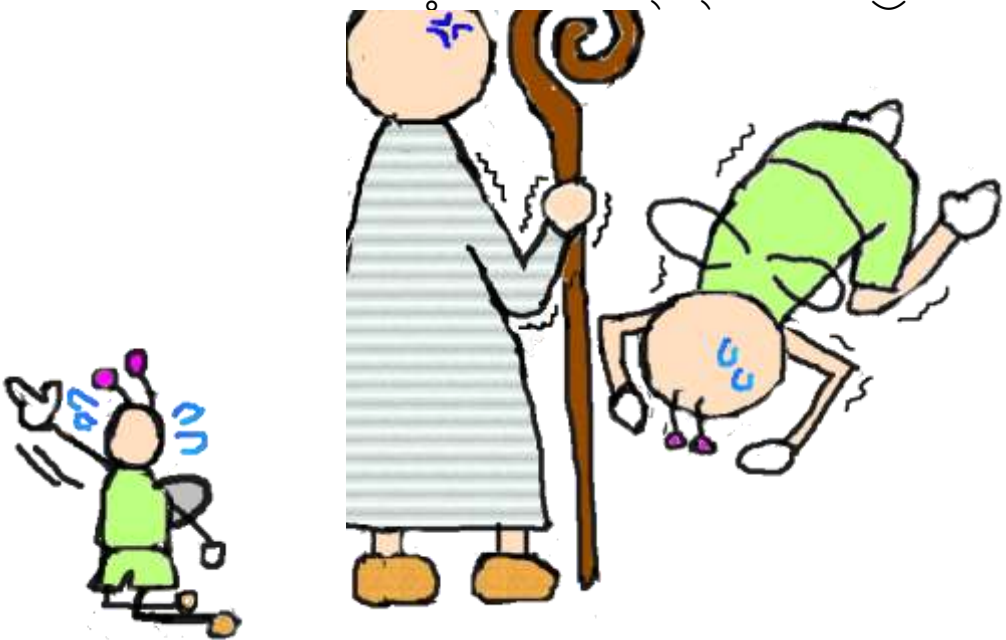
『ロイツにまかせてたら、わざと失敗をしかねない。』

『そうしたら、自分が神様にしかられる。』

そう思わせることで、『かけもち』をまぬがれてきたのです。

…と、そこへハックの話を聞きつけた妖精たちがやってきました。

ハックへの罰をへらしてもらおうと、長老たちを先頭に
チンジ「フ」きたのです。



“日々のお世話の大変さから魔が差しただけで、
本人も反省してるので寛大な「処置を」
との訴えでした。

一見、これは慈悲を請うているように
見えますが、実際はナアナアのもたれ合いを
求めたもの…。

ハック以外の妖精たちもみな、おおかれ
すくなかれ罪をおかしていたので、
この機会に自分たちまで
裁かれるのをおそれたのです。

そして、表面上は「メソッド」をしながら、
“元はと言えば、人手不足だから、
われわれのようなイタズラ好きを動員したのだ…。
今、われわれをクビにしたら、生きものの
お世話をするものがいなくなる…。”

さすがの神様も「こちらの訴えをむげにはできません…。
とたかをくくっていたのです。

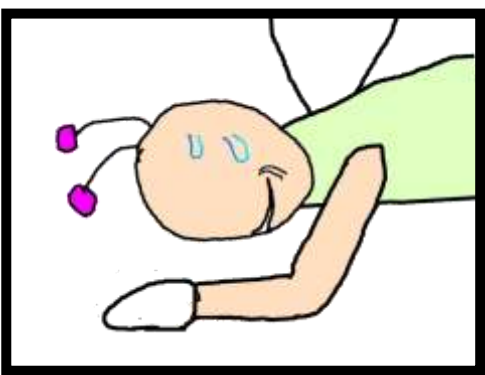
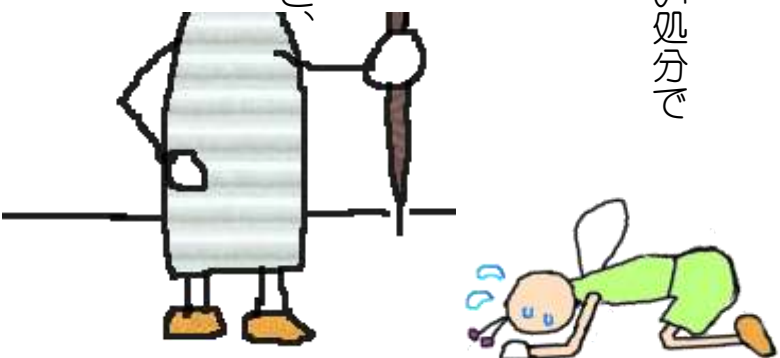
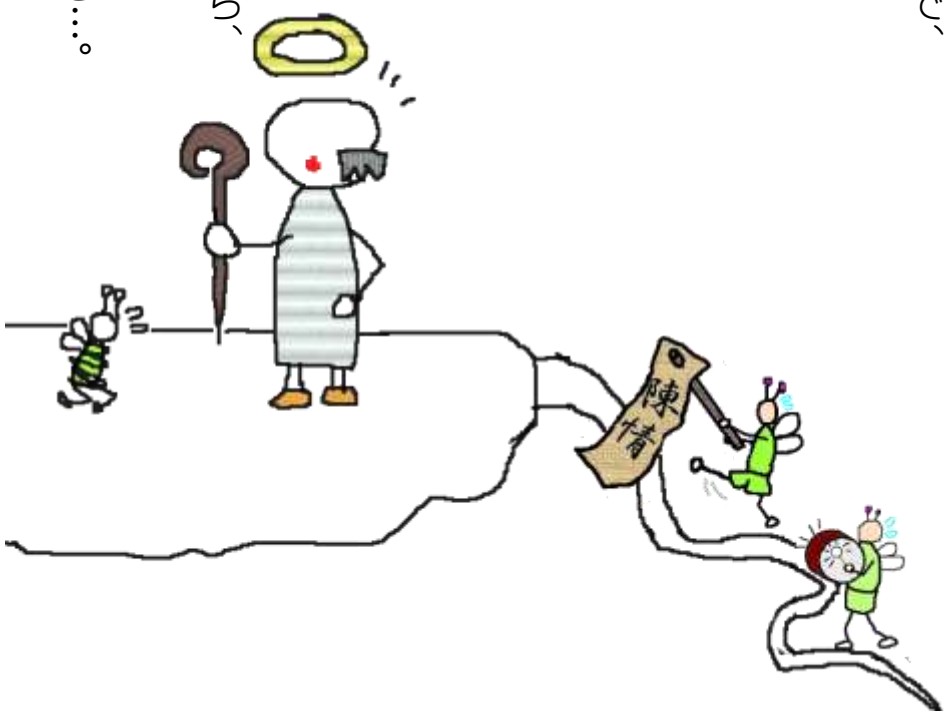
そして、大罪人のハックが形ばかりの甘い処分
済めば、自分たちの大半はおとがめ無し。
ウヤムヤとなるだろうとふんだのです。

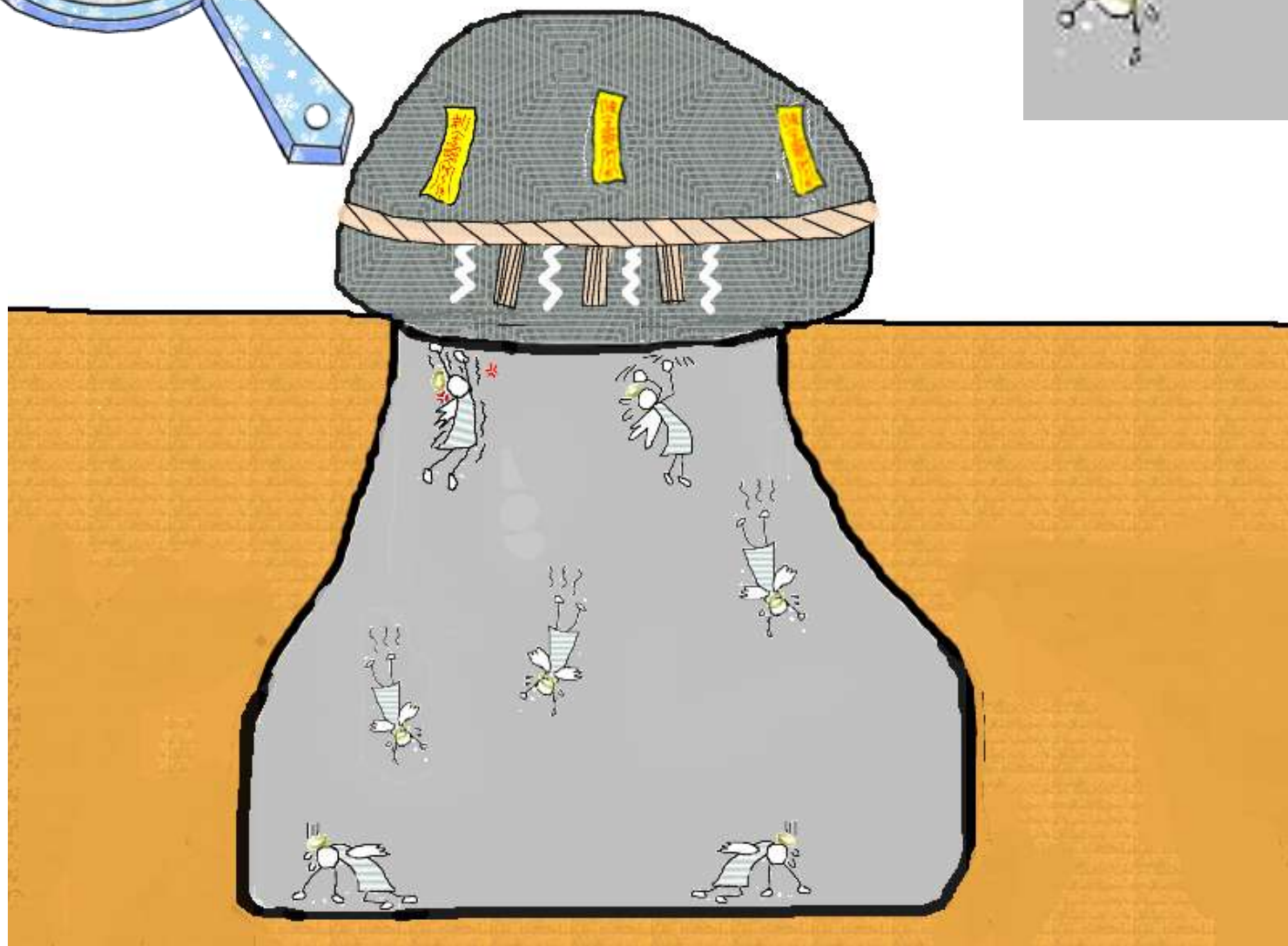
もちろんダメでした。

正義に妥協はありえないのです。

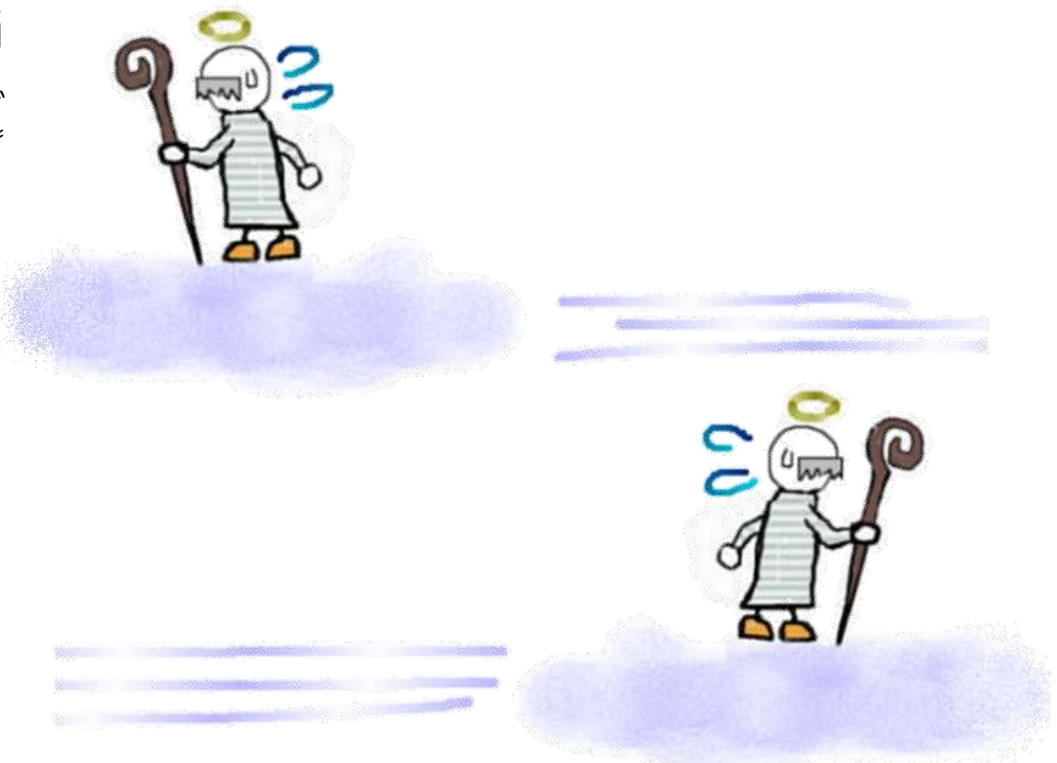
神様は、天使たちを地底の穴へほうりこむと、
返すカタナで妖精たちを魔法のカガミに
閉じこめてしまいました。

「おとがめ無し」
と訴えられたのでしたのです。





そごじつ、これまでお世話(せわ)をまかせっぱなしにしてきたじよを反省(はんせい)する
今度は自分が お世話(せわ)をするじよだったのでした。



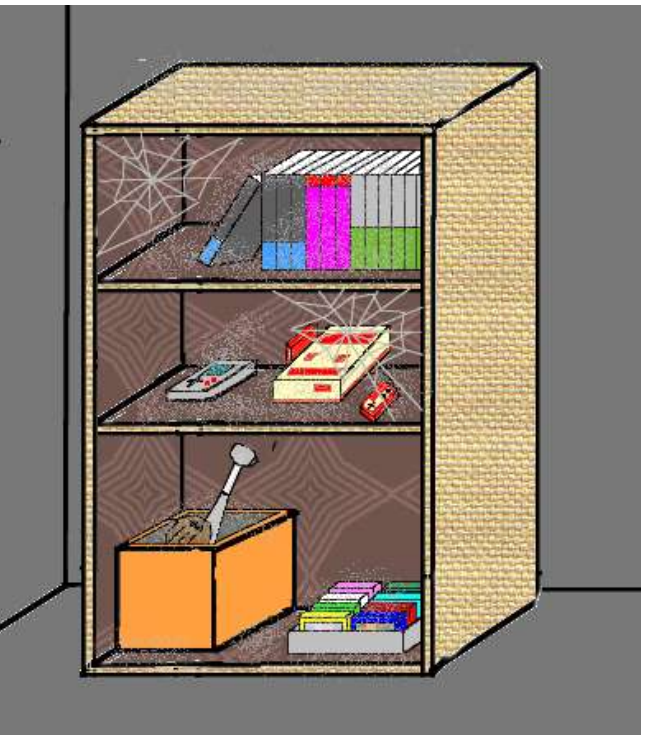
《エピソード》

あれから、しばらく…。

ここはエリオンのおうちです。

たくさんあったおもちゃも、今ではほとんどゴミノオキの中…。

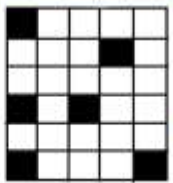
おすぎた体重もフィフにもなっています。



めでたし、めでたし...



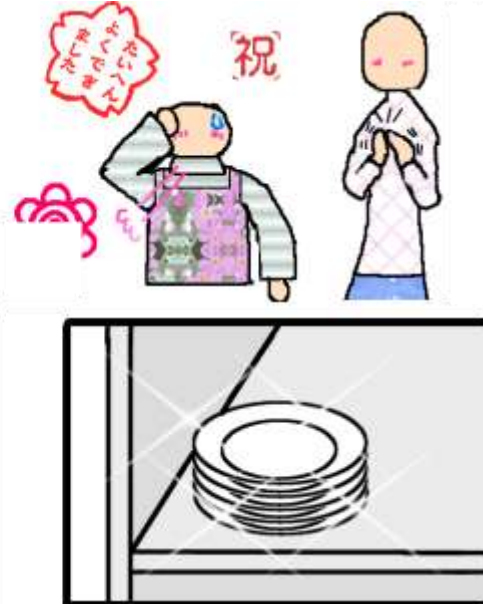
有	破	公
言	子	私
□	身	混
行	□	同



有	破	公
言	子	私
行	身	混
□	□	同



有	破	公
言	子	私
行	身	混
□	□	同



もちろん、遊んだりオヤツを食べたりしないわけではありませんが、お勉強もお手伝いも、みんなと楽しみながらやるようになったのでした。

《おまけ》

ある夜、エリオンは夢を見ました。
大きな神様が小さい神様をしかる夢です。

「サボるどころか、遊びほうけた上に悪事を見逃すとは、けしからん！」

「と、とんでもない！ 私はだまされたのです！」

「天使達が白状したぞ！ 手の込んだことをさせおつて！」



大きな神様は小さい神様をつかむや、

「これからは、お前が自分でお世話するのだ！」

と命じると、地上へ放り投げたのでした。

「ゆるされるまで二度と戻ってきてもならん！」

そこで目覚めると、手元に小さなお人形がありました。

どひいっわけか、夢で見た小さな
神様にそっくりです。

時計を見ると、まだ夜明け前…。

エリオンは人形を抱きしめると、

もう一度、眠りについたのでした。

これでホントウトオシマイ…

